

図表 1 「イランカラプテ」キャンペーン推進協議会ホームページ

族とすることを求める国会決議やこれを受けた官房長官談話以降、アイヌの人びとの名誉・尊厳の保持や、アイヌ文化等の次世代への継承が我が国にとって、多様な価値観が共生し、活力ある社会を形成する共生社会の実現につながるものと確信し、アイヌ政策の積極的な拡充に取り組んでいます。『北海道新聞』2013. 9.12)

高橋はるみ北海道知事は「自然との共生に根ざしたアイヌ文化のすばらしさを広く道民や国内外の皆様に対して伝える『イランカラプテ』キャンペーンを北海道からはじめることができますことを大変うれしく思います」(『北海道新聞』2013. 9.12)と談話し、NPO法人阿寒観光協会まちづくり推進機構の大西雅之理事長は「ハワイのアロハ、沖縄のめんそーれのようにイランカラプテの合言葉で、北海道を訪れる皆様を暖かく歓迎しようではありませんか」(ibid)との談話を、同じ広告に載せている。

アイヌという言葉がタブーだった時代はごく最近のことであり、現在官民を挙げて「アイヌ文化を広める」ためのキャンペーンを華やかに行っていることには、隔世の感がある。

けれども筆者の胸にはもやもやした霧のようなものが生じる。このキャンペーンでは“アイヌ文化”が「自然との共生に根ざした」すばらしいものとして褒め称えられている一方、アイヌの歴史についての言及が—その歴史がほかならぬこの「国」であり「政府」との関係によって作られてきたものであるにも関わらず—ものたりないままであることだ。このキャンペーンのホームページには「アイヌの文化と歴史」についての解説がある。だがその項目は「言葉、衣服、信仰、住まい、食文化、アイヌ工芸、芸能」であり、いわゆる「アイヌの歴史」に関係するものは、そのタイトルに関わらず、ほぼ描かれてはいない。このキャンペーンにとっての“アイヌ文化”は歴史的不是で、という批判が、このキャンペーンの背景で

ある(通称)アイヌ文化振興法<sup>2)</sup>への批判と同様に成り立つ。さらにこの“アイヌ文化”キャンペーンは「国」の「共生社会」の実現のためであり、観光産業のためでもあると語られている。いったいどのような歴史的経緯が、このような語られ方を導いたのだろうか。

本論ではこの現在を導いたアイヌの語られ方の系譜を、直接関係あると思われる戦後を中心に、アイヌ研究史とアイヌによる運動史を重ね合わせて整理し、概観することを目的とする。研究史と運動史を重ねるわけは、戦後のアイヌの諸運動が、和人のアイヌ研究と密接につながりを持ち、互いに影響を与え合いながらナラティブを変転させていったためであり、切り離して論述できないと筆者が考えることに由来する。むろんアイヌのすべてが運動家ではなく、アイヌ研究者のすべてが和人であるわけではないが、ことに二者の関係がアイヌにまつわる主流の歴史を作っており、代表的な人物の言動は重要である。

なお本論では便宜的にナラティブの特徴に準じて分類したが、これらは同時代に並存しているものも多く、特に時代区分として描いているわけではない点を断っておく。

本論でははじめに研究者による、アイヌ絶滅と同化のナラティブをとりあげ、次にそれに対抗してアイヌの活動家たちが主張してゆくアイヌの復権運動と文化運動のナラティブを取り上げる。最後に和人の研究者たちによる自然との共生ナラティブをとりあげ、私なりに問いへの答えを出し、今後の展望を考えたい。

## 2. 研究者による滅亡・同化のナラティブ

アイヌがいずれ絶滅し同化するというナラティブは、ごく最近までつよい影響力をもつナラティブであり、さまざまにアイヌを規定した。そのナラティブを主に作ったのはアイヌ研究である。

アイヌ研究の成立には、日本が欧米からの圧力のもと、1868年に近代国家として出発しなければ

ばならなかったという背景がある。日本人は欧米の近代国家に劣等感をもちながら、自らを日本周辺の他の民族とは違う優れた国民である、と定義しようとした。そのためアイヌは他の周辺民族とともに日本人の起源を探るための材料として、いかにすれば日本人の自己同一性の保障のために研究され（富山 1994：38）、主として風俗、習慣、言語などの民俗学的観点と、体質を研究する人類学的観点から研究されてきた。（植木 2008：188-9）

大正期に入ると日本人の起源について、さまざまな民族が混合してできたとする混合民族論が強固な定説となり、アイヌもその観点から研究されるようになった。戦前の日本はその軍勢力を背景に、台湾や朝鮮半島を併合し、領土を拡張させていた。その際の統合の原理として用いられた混合民族論は、日本人は多様なルーツからなり、異民族を同化することで発展してきたとする発想であり、日本の対外侵略や同化政策を正当化する論拠となっていた。（小熊 1995）

戦後に植民地を失った日本は一般に単一民族論へと傾き、アイヌへの関心を失っても、アイヌ研究者はアイヌ文化を研究し続けていた。彼らに特徴的だったのは、アイヌ研究の黎明期から一貫して、アイヌの異質性は野蛮で未開であるゆえであり、いずれ文明人である日本人に同化し、アイヌは滅び行く、というナラティブであり、その研究分野や年代が異なっても、たいへん似通った筋立てを持っていた。以下に著名なアイヌ研究者である金田一京助<sup>3)</sup>（図表2）のアイヌの描き方を探る。

金田一は1882年に盛岡市に生まれた。生まれた土地の蝦夷との関係が深いことと、金田一という苗字が珍しいので「蝦夷語」ではないかと祖父に聞かされて育ったことが、蝦夷の末裔であるアイヌへの興味となり、アイヌ語研究に入ったのかもしれない、と述べている（金田一 [1918] 1993：688）。1904年に東京帝国大学文化大学言語学科（現東京大学文学部）に入学し、国語学者



図表2 金田一京助（『私の歩いて来た道』  
[1968] 1997）

<sup>かずとし</sup>上田万年の示唆を受けアイヌ語研究を志した。金田一の業績はアイヌの口承文芸、特にユーカラ<sup>4)</sup>の研究で知られている。だが当初の日本人一般と、金田一のアイヌに対する当初の認識はこのようなものだったという。

それまでアイヌは無学文盲、無知蒙昧の民で、教えても覚えようとせず、約束しても守ろうとせず、恩をば忘れ、恨みをばいつまでも覚えている。そのくせ、酒を好んで産を破り、故郷を棄てて放浪する—まったく型通りの亡国の民だというのが、アイヌについて日本人一般の常識でした。（金田一 [1968] 1997：47）

けれども金田一がユーカラを採録し、1913年に柳田國男の尽力によって出版したことで、「人々がアイヌを見直してくださり、同時に、やっとわたしもアイヌ語の専門家だと世間からみていただくこともでき」た、とする。（金田一

[1968] 1997 : 112) アイヌが文字を使っていないことが、日本人に偏見の「常識」をもたせたが、金田一のユーカラの紹介によって、アイヌの“精神文化”の豊かさが知られ、アイヌの地位と金田一の地位を向上させた、ということである。

金田一の業績は多くのアイヌの人々の協力の上に築かれた。例えば金田一が1918年ごろにアイヌの女性、知里幸恵<sup>5)</sup>を自らの“インフォーマント”にしたきっかけとなった言葉を紹介する。

私は、全財産をついやしても、全精力をそそいでもおいしいとは思わないからこうやっている。しかし、あなた方は私と違う。あなた方は時世に遅れちゃいけない。古い事にかまわず、新しい事をどんどん吸収して、一人前の日本人として、後ろ指さされない立派な人になってほしい。(金田一 [1968] 1997 : 132-3)

ここにあるのは、同化するべきというアイヌへの呼びかけであり、一方の自分たち研究者はアイヌの意向とは関係なく、独自にアイヌ文化を研究し、保存していくことで救済をする、という姿勢であろう。このパターンリズムに満ちた姿勢は今日ではただちにその差別性を指摘されるであろうが、当時において、アイヌを救済するナラティブでもあった。例えば人類学者の小金井良精が、1889年にアイヌは「頽廢人種」であり、「未開人種は文明人種の為に段々破られて仕舞って滅亡」するので「純粹のアイヌ<sup>ママ</sup>人種としては何れ滅亡する」だろう(小金井 [1889] 1928 : 511-3)と断言している態度に比べれば、上記の金田一の言葉はいかにもやさしくアイヌに響いたはずだ。

果たして知里は「アイヌのこととさえいったら、なにもかも、恥ずかしいことのように」思っていたけれど、「アイヌには縁もゆかりもない先生」がアイヌ文化を「貴重」だと思っていることに感涙し(金田一 1968 [1997] : 133)<sup>6)</sup>、自らユーカラを筆記するインフォーマントとなった。

金田一は上記のような言明で大勢のアイヌの協力を得ることができた。一方で金田一がアイヌの日常生活に興味を示さなかったことが指摘される。(木名瀬 1997 : 1-21) 木名瀬は金田一がアイヌに「文芸」をみいだすことによって、社会生活における個別的な利害経験といった日常的な部分を捨象することに成功したとする。金田一はユーカラを文字として記録し、過去へと遡行を試みた。このようなアイヌ研究の姿勢を「現在の過去化」とし、そのような視点のもとでは「現在」に目を向ける必要はなかった、と評した。(ibid)

実際に金田一のナラティブは同時に、アイヌに対して、同化され滅亡することを迫るナラティブとして機能していた。上記の言明は、同化しなければ「後ろ指」さされる、と言っているに等しい。このナラティブの中でアイヌ研究者にとってアイヌは、包摂の対象となるインフォーマントか、あるいは口承文芸を持たず排除の対象となる「亡国の民」でしかいられない。これではどちらもアイヌが自らの歴史の主体であるとは認められないだろう。これがやがてアイヌに対する差別や抑圧を正当化したマスター・ナラティブとなった。

この和人のナラティブは、知里ではないほとんどのアイヌから、アイヌとして存在する余地を剥奪し(東村 2000 : 40)、自らの伝承を放棄させ、差別を解消するために、アイヌ自らが存在しないものであるかのようにふるまうようになった(小川 1997 : 378-9)。例えば野村義一<sup>7)</sup>の祖母と母は二人きりのときはアイヌ語でよく会話していたが、野村の前では「決してアイヌ語を使わなかった」と野村は回想し、祖母たちは子供を「アイヌの事柄から切り離して育てよう」としており、それが「子供たちの幸せにつながる」と信じていたのではないかと解釈する。(竹内編 2004 : 151-2)

金田一が主唱した説で影響力が大きかったものには他にアイヌが白人であるという説がある。アイヌ白人説について、金田一は1923年に欧米の研究者の説を紹介しつつ、やや慎重な筆致だった



ものの、すでにアイヌと白人の容貌の相似から傾いており（金田一 [1923] 1993 : 16-20）、1930 年には肯定し（金田一 [1930] 1993 : 58-9）、戦後の 1964 年に至ってもなおアイヌは白人だと断言している。（『朝日新聞』1964.8.9）

金田一の説によれば、古代蝦夷は投降して内地の全国に移植された。だから「アイヌの血はわれわれの国民には殆んど全国的に混じったものと見なければならず、そして蝦夷族が全く大和民族に同化して日本が出来たのである」、「もしもアイヌが低劣な民族であったなら、これと混血することによってわれわれ国民の素質が低下したかも知れない」、だがアイヌ白人説は“証明”されたので「アイヌが機会を恵まれさえすれば、優秀性を発揮するゆえんがよくうなづかれる」。「思うに大和朝廷が蝦夷、すなわちアイヌに対して取って来た政策は、凡そ他人種に対する最も人道的なものだったようである。」（金田一 [1951] 1993 : 312-314）

金田一によってアイヌは遠い昔に日本人と交渉があったにすぎない“人種”として切り離され排除されたが、再び「白人であるゆえに優秀」であり、それを同化している日本人は人道的である、と主張される。人種混合説であるがここではアイヌを“異人種”とする色あいがより強い。さらに金田一にとってはアイヌを美化し包摂することが、日本のナショナリズムを強化するという回路につながっている<sup>8)</sup>。

このアイヌ白人説は単純に外見の相似から出たものであり、科学的とはいえなかったが<sup>9)</sup>、1960 年代後半から<sup>はにはらかずろう</sup>埴原和郎や尾本恵市ら自然人類学者の緻密な研究によって否定されるまでは有力な仮説だった。

このナラティブはアイヌと日本人の関係をほとんどないものとすることによって、一般の和人類研究者のアイヌへの関心を低下させた。よしんばアイヌが白人と関係があったとするとせよ、それは遠い昔に推定されることであり、その視点のもとでは現在のアイヌの生活は、白人説を裏書きする

ものとして以外は雑音として排除されるだろう。いずれにせよアイヌはこのような好奇心からの接近を受けるものの、一般には無視し得る程度の描かれ方であった。

### 3. アイヌによるアイヌ復権運動のナラティブ

終戦後、1960 年代からの高度成長のなかで、アイヌの経済的地位や社会的地位は依然として低いままであった。1950 年ごろから、国が不良環境地方改善事業を行うなど一連の同和対策の流れを受けて、市町村や道がアイヌの状況を調査し、そのことが刺激となって 1961 年に社団法人北海道ウタリ協会（名称当時。現アイヌ協会）が再建され（竹内編 2004 : 204-5）、主としてアイヌに対する福祉対策の窓口として機能した。そのような活動から出発した当時のウタリ協会は、アイヌの日常生活におきる問題に組織として対処できていたとはいいがたい。

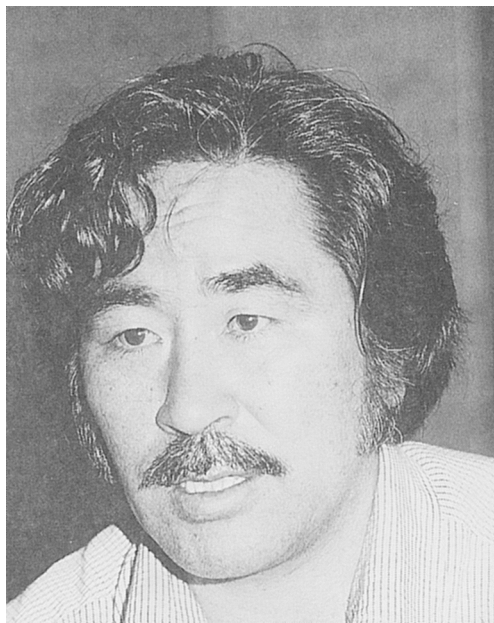
多くのアイヌの若者が都市圏に仕事を求め（小川 1997 : 379）、その多くがアイヌであることをパッシングしても、日々の暮らしの中でアイヌに対する差別が薄れたとは言えなかった（小内 2012）。だがアイヌの若者の多くは、親の世代からアイヌであることの肯定的な評価を得ないままに育っており、それを得ようにも戦後から 1960 年代までのアイヌに関する著作は非常に少なく（東村 2006 : 12-20）、自分に何が起きているかを理解し得ない状況に置かれた。北原きよ子<sup>10)</sup> は 1960 年代にウタリ協会に入会し、「アイヌを雇っちゃ店の格にかかわるといわれた。こういうことは私ひとりではないはず」と日常の差別を訴えたが、理事長（野村義一と思われる）から「この町の和人は皆、人格者になった。お嬢ちゃん、元気を出して働きなさい」と言われ、「はぐらかされた」思いをした（北原 2013 : 135-6）。若者たちの日常の問題をウタリ協会が十分にサポートできなかった証左であろう。

アイヌの若者たちが発言する機会は、1960年代後半から世界的におきた学園闘争と、やや遅れて日本にも波及した“下からの歴史”の問い直しの流れによってもたらされた。その発言によって彼・彼女らは民族的主体化<sup>11)</sup>を試み、民族に基づく主張をし、日本社会にインパクトをもたらし、ナラティブ・ターンをおこした。

この時期のアイヌの政治的発言は、1968年の北海道開拓百周年を記念した諸行事が、和人による開拓を礼賛する歴史観によって行われ、その北海道の開拓によって周辺に追いやられたアイヌの存在自体がないことになっている違和感を、アイヌ女性の戸塚美波子<sup>とすかみねみねこ</sup>が提起し、反響がおきたことが始まりとされている。(花崎 2009: 138-9) ちなみにこの提起は「北海道百年を記念して建設する百年塔のその土台の北海道の土の下には、われわれアイヌ人の流した悲しい血がしみわたっていることも忘れないでほしいのです」(戸塚 2003: 189) といった、つつましい主張だった。

アイヌの政治的主張は、ニューレフトの参加によって、エスカレートしていく。1972年に札幌で開催された日本人類学会でアイヌ研究のシンポジウムが開催された際、アイヌの結城庄司<sup>ゆきしょうじ</sup><sup>12)</sup>(図表3)とニューレフトの太田竜<sup>おおたりゅう</sup><sup>13)</sup>らが会場を占拠して、アイヌ研究者の「同化」に対する認識の告発や、「和人の側のアイヌ研究、アイヌ専門学会は、アイヌ同族を、研究と解剖の客体として位置づけてきたのではなかったのか」と異議申し立てをした。(当日アイヌ解放同盟が会場に配ったチラシより)<sup>14)</sup>

太田はアイヌを“原始共産制”に生きる“窮民”であり、「共産主義革命」の担い手として世界革命を起こすとし(アイヌ革命論)、「北海道に侵入し、アイヌ同胞を主体的能動的に絶滅してきた北海道五百万人の和人の群れは、ネズミのように叩き殺してしまわねばならない」(太田 1971: 124) といったアジェンションを繰り返した。その主張に扇動された数々のテロや破壊行為が1972年から行われ、アイヌ問題は一気に世上の



図表3 結城庄司(『遺稿 チャランケ』  
[1980]1997)

注目を浴びるようになった。特に東アジア反日武装戦線「狼」の起こした1976年の北海道庁爆破事件では「道庁を中心に群がるアイヌモシリの占領者ども」は「第一級の帝国主義者」であるという声明のもと(『北方ジャーナル』1976.5)、死者2名、重軽傷者87名を出す事件を起こしたことは大きく報道された。(『朝日新聞』1976.3.5)<sup>15)</sup>

これらの事件は、いずれもアイヌが起こした事件ではなかったが、アイヌによって起こされたと誤解を呼んだ。結城はインタビューにこう答えている。「今回死者が出たことを知ったときはショックだった。アイヌ民族と爆弾が変な風にイメージされちゃうだろ(中略)道庁爆破があつてから、外出するのがいやで家にこもったきりのウタリの奥さんもいるよ」(『朝日新聞』1976, 3, 8)。アイヌモシリ解放を訴えたテロは世間のアイヌへの偏見を強めていた。一時期太田と行動を共にしていた結城は「アイヌ過激派」とみなされ、アイヌから遊離したという。(竹内 2009: 86)

その後1977年に結城は北海道大学経済学部長の林善茂<sup>16)</sup>教授が「北海道経済史は辺境における開発の歴史として見ていくことであり、主体は日本人であってアイヌではない」「アイヌの歴史は切り捨てる」、また「和人が渡って来た時に、アイヌの娘と婚姻があった。先進民族にあこがれるのは、占領軍時代のパンパンと同じである」などと講義で述べたことに対し、学生たちとともに、教室を封鎖し糾弾を行った。(結城[1980]1997:177-244)この糾弾は激しく、教室に閉じ込められた林を救出するために、機動隊が出動した。結城は12月に北大構内にテントを張って糾弾を続けた。翌年、林は萱野茂の仲介によって全面的に謝罪し、授業内容を組み替えると約束し、糾弾は終結した。(ibid)

著名なアイヌ研究者の高倉新一郎は、この事件によって、アイヌ研究には「思いがけないようなことが起きる」と感じ、「アイヌ問題の恐ろしさを知って、できるだけ触れないようにしています」と述べた。(現代企画室編集部1988:218-21)アイヌ研究の取り組みが以降低調だったのは、このような研究者の恐怖が背後にあるだろう。

#### 4. アイヌによる文化運動のナラティブ

民族的に主体化されたアイヌは、自らの主張の正当性を担保するものとして、やがてアイヌ文化を政治的なスローガンに用いるようになった。それはほとんど前記の政治運動と同時に起こったが、わずかにタイムラグがある。

1972年、萱野茂と貝沢正<sup>17)</sup>によって二風谷アイヌ文化資料館(名称当時)が開設された。その内容は萱野によって蒐集されたアイヌ文化の物的資料だったが、貝沢が式辞でこのように述べたことは、その時の潮流にかなうものだった。

私たちは、この資料館を中心にして民族の歴史を知り、新しい正しい歴史を掘り返し、それによって自信をもち、よりいっそうの努

力を積み重ね、三百年来持ちつづけた卑屈と劣等感をすて、格差と差別の解消をはかりたいと思います。(『社会新報』1972.8.2)

落成式には博物館の開館をアイヌの観光開発と結びつけて想像し、疑いを深めていたニューレフトも参列し、会場には緊張感が漂っていたが(新谷1979:78-9)、この貝沢の式辞を聞いて納得したらしい<sup>18)</sup>。

前節のような“いずれ滅亡する”、という強いナラティブに対抗するためには、滅亡しないという主張の根拠が必要であり、権利回復のためにはアイヌ文化の継承の証明が必須とされていた。アイヌの復権運動は文化運動に組み込まれて、アイヌの運動といえばほとんど文化運動を指すようになった。

アイヌの復権運動に取り組む活動家は、こぞって文化運動にも取り組むようになった。結城は1982年からアシリチェップノミ(鮭を迎える儀式)を札幌の豊平川の河川敷で行い、その意義を「コンクリート・ジャングルのここ札幌で、アイヌ民族の伝統行事を行い、滅びることを拒否し続けているアイヌが多数参加すること自体が、声高に叫ばなくとも、鋭い刃物になる」と述べた。(竹内2009:87)竹内はこの祭りによって鮭の特別採捕許可を得たことは、明治時代に禁猟とされたアイヌ民族としての鮭漁の復活であった、と評している。(ibid)

アイヌ女性でアイヌの伝統刺繍家のチカupp美恵子<sup>19)</sup>が1985年に『アイヌ民族誌』(アイヌ文化保存対策協議会編:1969)について起した裁判も特筆される事件である(チカupp1991)。この裁判は通称、肖像権裁判といわれ、チカuppの写真が無断で掲載したことに対する異議が名目だが、実質的には『アイヌ民族誌』の研究者たちのアイヌ表象の倫理を問うものだった<sup>20)</sup>。

『アイヌ民族誌』は著名なアイヌ研究者を集め、その集大成として戦前から企画されながら実現せず、戦後、1968年の北海道開拓100周年記念に

出版された。『アイヌ民族誌』の冒頭で、金田一京助はアイヌを「その風貌・体質は和人などとは全く異なり、しかも日本付近のどの方面にもこれと似た種族の生存がない全く特殊な存在である」と断じている。また、『アイヌ民族誌』冒頭の写真のページには、上半身裸のアイヌ男性の多毛を強調して後ろから写した写真が掲載されている。萱野茂はこの写真を見たとき、不愉快さのあまり、そのページをやぶってストーブで燃やした、とのちに語っている。(現在企画室編 1988: 90-1) “アイヌらしい”とされ、和人の好奇の対象だった身体的特徴は、現在でもアイヌにとってのステイグマとして内面化されていることが、多くのインタビューで語られている(アイヌ民族の現在と未来を考える会編 1988、レラの会編 1997 など)。にもかかわらず研究者はアイヌの意向に頓着せず、日本人のアイヌへの好奇心まなざしを満足させる描写をしていたのである。当時のアイヌ研究者がその著作の読み手をアイヌではなく、和人として想定していたことは明らかであろう。

裁判でチカップ美恵子は、かつて自らが出演したアイヌ文化を紹介する映画のスチール写真と、上記のような写真が、「標本の如く並べられ」、「滅びゆくものとして決め付けられ」たことに対して、「これほどの侮辱」はない、と述べた(現在企画室編 1988: 16-8)。

チカップら原告側は、被告の主張する当書の「社会的学問的意義」を突き崩すため、研究としての精度を突いた。『アイヌ民族誌』において「歴史的な考察」がされておらず考証がおろそかになっている、と批判している。確かに『アイヌ民族誌』は明治時代に行われていた習俗を指して「アイヌの原始時代」と解説する(アイヌ文化保存対策協議会編 1969: 343)など、時代考証に注意を払っていたとはいえない。また多数用いられた写真の多くに基礎データの付記が欠け、アイヌの多様性や個性は表現されていない。現在から見ても『アイヌ民族誌』上のアイヌは、どの時代のどの地方にいたのかが不明で、現実の存在には見

えない。

しかし原告チカップの歴史観はどれほど『アイヌ民族誌』と異なっていたかは、疑わしい。同裁判におけるチカップの陳述書を紹介する。

この世に存在する<sup>・</sup><sup>・</sup><sup>・</sup>かたちあるすべてのものが魂を持っている。月や星、森や湖、花や木、鳥など<sup>・</sup><sup>・</sup><sup>・</sup>すべてのものが…。こう信じた女たちが、この<sup>・</sup><sup>・</sup><sup>・</sup>かたちあるものの像をもとめて、刺繍を施すとき、それは、そのものを生けるカムイ(神)に仕立てることだった。そして、その一針一針は独特な抽象文様となり魂を結んだ。(現代企画室 1988: 254)

和人研究者による伝統的なアイヌ文化観と、この美化されたロマンチックなアイヌ文化観は、ほとんど歴史的ではない、という点でよく似通っている。研究者たちがアイヌ像をみにくく野蛮だと描いたことは、チカップによって正反対に、美しく素晴らしい、と裏返された。ゆえにチカップのアイヌ文化観は研究者のアイヌに対してもつ視点の限界をそのまま引き受けることになってしまった。このようなナルシズムに満ちたアイヌ観では、この美化されたアイヌ像に当てはまる人しかアイヌになれず、他者にそのアイヌ像の承認をなかば強要するようであって、他者との関係を阻んでしまう。十分に自らの主体化を果たしたとは言えないのではないか。

この裁判では審議によって『アイヌ民族誌』の研究書としての精度の低さが証明され、1988年に和解金を払い、「おわび」をおおやけにすることで決着した。(現代企画室 1988: 274-5) この事件は研究者に衝撃を与えた。判決を受けて日本民族学会(名称当時。現日本文化人類学会)はアイヌ研究に関する日本民族学会研究倫理委員会の見解を示している。(日本民族学会研究倫理委員会 1989) 多くの研究者は研究自体を「断念」するか、あるいは「民族(文化)運動の協力者となることを選択」(清水 1998: 56)する以外の道は



ほとんど残されておらず、アイヌ研究は低迷した。

このような経過を経て、アイヌの政治・文化運動に関するナラティブは、アイヌに関わるアイヌ・和人支援者、研究者のコミュニティの中で、無視できないモデルストーリーとなった。

## 5. 和人による自然との共生ナラティブ

アイヌへの関心の高まりは、1980年代から90



文明国でありながら狩猟採集時代からの伝統が生きていることが日本の誇り。——梅原猛

図表4 梅原猛（『政治と哲学——日本人の新たな使命を求めて』1996）

年代に、それまでのアイヌ研究とは筋の異なる、思いがけないところから起きた。著名な哲学者で政治への影響力をもつ梅原 猛<sup>21)</sup>（画像4）が主唱した、アイヌは“自然との共生”をする「原日本人」である、というナラティブの隆盛である。この“自然との共生”ナラティブは、戦後第二のナラティブ・ターンを起こした。アイヌと自然を結びつけるナラティブは1970年代からアイヌも提唱していたが、ひろく人口に膾炙し、現在でも力を持つマスター・ナラティブとして、アイヌに関わる政治に影響したこととは梅原の活動によるところが大きい。

梅原の「原日本人」論の背景には国際化の進展とともに日本人の優越意識が希求され、日本人論が盛んになったことがあることと（島菌 1995：1）、開発によって自然が脅かされることへの恐れもあったろう。

梅原は1945年に京都帝国大学文学部哲学科（名称当時。現京都大学文学部）に入ったが、「戦争に行った経験と西田哲学のずれ」に悩み、「本質的な永遠の世界を追求したいという気持ち」（江上ほか編 1980：16-7）を強くもち、「日本のことを知らなければならない」（ibid）と思って、日本史や仏教を研究した。そこで“怨霊”を祭ることの起源を縄文文化に求めていたところ、1979年にアイヌの宗教の言葉に関する藤村久和<sup>ひさかず</sup>の研究を知った。（ibid：116）<sup>22)</sup>

藤村のアイヌの宗教・言語研究から着想を得て、梅原が最初にアイヌが原日本人論を唱えたのは1979年、日本文化の総合的研究の必要性の「痛感」から企画されたシンポジウムの席上である（江上ほか編 1980：7）。梅原はそこでは主にアイヌ語との比較によって古代日本語のなぞが解けるとし、以降“アイヌ原日本人説”を提唱するようになる。（梅原・埴原 1982）

梅原は金田一京助が、アイヌ語を日本語と全く違う言語と考えたのは「言語学的カテゴリー論」によるものであると批判し（梅原 [1981] 2001：355）、根底には「無意識のうちに日本人がもって

いた大和民族優越史観があったのではないかと推定している。(梅原 [1986] 2001 : 455-6) そして梅原は自分の説を「今なお日本人の心に残存する、アイヌといわれるひとびとに対する積年の偏見をなくするに役だつと私は思う」(梅原・埴原 1982 : 7) ともいう。

梅原の金田一への批判は的を射ているが、花崎の言うように、アイヌと和人が同根の民族であることがわかれば「偏見を解消する」という梅原の仮定は、異民族に対する差別を肯定することになってしまいかねず(花崎 1986.1 : 104)、妥当とは言えまい。

梅原は、地球環境の破壊の始まりを産業革命以後の工業化社会にのみ求めるのは不十分とし、実は環境破壊は「人間の歴史とともに始まった」のであり、「農耕牧畜によって蓄積された富の上に築かれた都市文明」は「森を破壊することによって」築かれたのであり、そこに最初の破壊を見なければならぬ、という。(梅原 [1996] 2001 : 50-8) それに対してアイヌ (= 縄文) の宗教では、「人間と他の動物はいずれもこの地球の平等な市民であり、人間が他の動物にまさった優越的原理をなんら所有していない」という「共存」の原理と、「生きとし生けるものは、永遠にその魂が生と死を循環する」という「循環」の原理をもっており (ibid : 109)、そのために森が保存されている。この環境破壊の危機から人類を救い出すために、人類は、「この狩猟採集時代の世界観にたちもどり、個人ではなく種を中心にした考え方、つまり永遠の生と死の循環という思想を取りもどさなければならない」と述べる。(梅原 [1991] 2001 : 220-1)

そして梅原の縄文 (= アイヌ) に対する思い入れは、中曽根康弘との対談集『政治と哲学』では「文明国でありながら狩猟採集時代からの伝統が生きていることが日本の誇り」(画像 4) (中曽根・梅原 1996) とまで断言されるまでに至る。

梅原の「アイヌ原日本人論」の影響を述べる。梅原の説は古代文化に関するロマンチズムをか

きたて、和人のアイヌ文化への憧れを成立させた。だがそれでアイヌに興味を抱く和人は自らの矛盾を自らに「はねかえさないかたちで」、「興味本位なかかわりで近づいてくる」ものが多く、それは「どこかでアイヌの側を傷つける」ものであり「対等に向き合えることじゃない」(成田得平ほか編 1985 : 288) 傾向が指摘され、批判される。

一方で梅原の説はアイヌ文化への再評価につながった(百瀬 2004) とも言われ、多くのアイヌは喜んでいたという(例えば豊岡 1983)。前時代のような“劣等民族”ではなく、一気に「自然と共生する聖者」(細川 1998) のように扱われるので、心地よく感じるのは無理もない。

確かに梅原の説はアイヌについて語ることをタブーではなくし、語りやすくした。だが、「アイヌはすばらしい文化をもっている。(中略) 差別だ、差別だってさわいでいいないで、それを学び伝えてゆくべきだという立場から」アイヌに言及することが「はやっている」(成田得平ほか編 1985 : 286) と語られるとおり、それは前述のアイヌにまつわる事件や糾弾に疲れていた人々に、アイヌ文化の包摂の仕方を教え、アイヌの糾弾やアイヌ文化による抵抗を無力化するナラティブでもあったのだ。しかも梅原の以下のような説は戦前の混合民族論とよく似ている。

私はこのごろ日本民族を単一民族と考える考え方をやめました。日本民族は複合民族、というより弥生文化をつくった民族が原住民を支配することによって生じた混血民族ではないかと思うようになりました。そこで思うのですが、日本の文化には同一化の原理が働いている。つまり、人種の違った人々を同一化するたいへんすぐれた工夫が日本文化の根底にある(江上ほか編 1980 : 142)

そのころ『アイヌ史』(1988-9) の執筆にとりくんでいた貝沢は、梅原らの説にひそむ危険性に注目し、『アイヌ史』の刊行前に発行されたパン

フレット、「アイヌ史の要点」で、以下のように批判している。

最近はまだ、確かなイメージとしてはとらえがたい、いわゆる「縄文人」とアイヌを結びつけ、和人とアイヌが同根であるといういい方をした説が、マスコミなどを通じて広められている。これと同類の説は、第二次世界大戦前の研究者によって盛んにとなえられた。(中略) (この説が信じがたいのは) 和人とアイヌが起源的に一致するということがあるにしろないにしろ、和人のアイヌに対する耐え難い偏見や差別は、ここ数世紀以上にわたって存続されてきたという事実があるからであり、研究者の人種起源や民族起源の探求によって、それらの問題が解決できるという理由も保証もないということが明らかだからである。(1984)

貝沢の指摘するように、この梅原らの説は、戦前のアイヌの日本人への同化のナラティブに共通しており、アイヌを“人種”とみなしている。東村<sup>たけし</sup>岳史は「高貴な野蛮人モデルの変種に近い」(東村 2002: 237) と述べている。このナラティブは古くからの人種論が新たに「自然との共生」という装いを得て再登場したものであろう。現代のアイヌを古代の縄文人と同じとみなすことは、アイヌの現実の生活を排除することでありつつ、アイヌの歴史と現在はこのようにして再び否定されるに至った。

## 6. おわりに

今まで見たナラティブを概観する。

第一に、戦前から続いた、和人研究者によるアイヌの滅亡と同化のマスター・ナラティブにおいて、アイヌの現在は研究者にとって無視しうる存在でしかなかった。

第二に、戦後にそのカウンターナラティブとして

のアイヌの政治運動と文化運動のナラティブは、第一のナラティブ・ターンを起こし、アイヌを無視できない存在にした。だがその運動の過激さゆえにアイヌ研究は衰退した。

第三に、1980年代には再び和人研究者から、アイヌの人種論をエコロジーで色付けしたナラティブが提唱され、第二のナラティブ・ターンを起こしたが、あいかわらずアイヌの現在の日常は重視されず、歴史的とはいえないものだった。

一つの発想—アイヌは“自然に近い野蛮人”であり“滅びるべき”という発想—をくつがえすために生まれた、“アイヌは素晴らしい”とするアイヌ側からの言挙げは、和人研究者の“アイヌは自然に近いからこそ素晴らしい”、という賞賛に吸収され、当初のようなカウンターとしての役割は無力化されていった。現在はその賞賛(と隣り合わせの排除)のナラティブを背景にした、通称アイヌ文化振興法によって“アイヌ文化”が広められている。冒頭で述べた「イランカラプテ」キャンペーンはまさにこの延長線上にある。

何かをくつがえすためにその時々新しいナラティブが生まれ、やがてそれが単色の像に収束してしまい、新たな排除を生み出す。カテゴリー化とはそのような避けがたい実践であるのだろう。だが、もし自らの語りが排除を生み出す可能性に敏感であるならば、その時々を点検し解体し、鏝なおすことが固定化を避け得る。

まさにその意味において貝沢正の地域誌『二風谷』(二風谷部落誌編纂委員会編 1983) は、そこに生きるアイヌを含む人びとの多様性や重層性を通じて描き出した書として特筆される。(新井 2012) 貝沢は、それまで研究者や活動家たちから省みられなかったであろう、必ずしも民族主体的ではなく、“アイヌ文化”を継承しない“普通”の人びとを、当時すでに亡くなっていた人まで含めて、あまざず記録に残そうとする。語りにはアイヌであることを誇るものも多数含まれるが、そうではない日常や歴史経験についての語りも多数含まれて、両者は並存する。

例えば『二風谷』では、第五章「資料集」に「証言集」と題して、第一章の「わが家の歴史」に収まりきれない、さまざまな語りが収められている。そのうち筆者はアイヌと思われるある男性の語りに、貝沢のアイヌ史への意図を見る。

「戦後軍人でシベリヤに抑留<sup>ママ</sup>されたものは皆口を揃えて苦しかったことの話をしている。俺も苦しかったがその中でもよい思い出がある。スラブ美人を泣かせたことだ」。この男性は収容所で運転手をしていた。「泣かせた」女性のうち一人は女性運転手で、車を雪道にのめりこませており、助けなかったら泣かれたことで、もう一人は「ダモイ（帰還）の話が出た時（中略）俺の運転していたバスの車掌が「別れがづらい」と泣いた」ことである。自分がロシア人女性に慕われていることを妬んだ日本人捕虜らから糾弾されそうになったが、その時に「えらそうなロシア人」が現れ、「恋に国境はないもので、人間は皆同じなのだ。（中略）人間としての男と女の姿ではないのか」と「説明」したので、「無事帰国することができた」。（二風谷部落誌編集委員会編 1983：291-2）

この語り手は同じ町内ではあるがこの本の範囲とする二風谷に居住しているのではないので、第一章に登場するわけにはいかなかった。だが、推測をたくましくするなら、これはこの語り手にとって日本では得られないような輝かしい、自尊心を抱かせるような物語であり、記録に残らなかったのではないだろうか。アイヌ文化の継承者や、被差別者としての姿を求める研究者や活動家たちは、このような話を聞き取りには訪れないし、聞き取っても雑音としておおよけにされない類いのものだろう。だが貝沢はこの男性の思いに答えて、このスペースを用いたように筆者には思えるのだ。

貝沢にとってアイヌの歴史とはそれまで作られてきた、想像上の美化されたアイヌらしさではなく、このようなありのままの個性的な日常の姿の集積ではなかったろうか。貝沢はライフストーリーの聞き書きによって、アイヌの個性と多様性

を重層的に書くことで、アイヌ自身を自らの歴史の主体として位置づけることを目的に『二風谷』を描いたと思える。

すなわちその『二風谷』の描き方自体が、従来のアイヌ研究や諸運動への批判として存在しているのではなかったろうか。貝沢の視点からは、それまでの（現在も続いている）アイヌ研究と諸運動の描き方は、狭隘で没個性的な定義によるアイヌ像として眺められたはずだ。貝沢は1983年の時点でその批判をなし得ており、『二風谷』は先駆的な事例である。まさにこのような視点—アイヌの多元的なリアリティを、何かの思い込みで排除せず、重層的なコンテクストを見分けながら、かつ内在理解的であるような視点—こそが、アイヌという定義のほとんどが、国民の無害な物語として吸着されようとしている現在を、揺り動かすものではないのだろうか。本論では戦後のアイヌにまつわるナラティブを概観するために、雑駁なスケッチに終始した。以降は綿密に議論を展開し、貝沢正論と結びつけて論じたい。

〔付記〕本論文は2013年10月14日から4日間にわたってスウェーデン、ウプサラ大学ジェンダー研究所によって開催された国際シンポジウム“Researching and exploring by, for, and with indigenous peoples, minorities and local communities”での発表に加筆したものである。招聘して下さったMay-Britt Öhman教授とCentre for Gender Researchの皆さん、参加者の皆さんに感謝する。

## 注

- 1) 萱野茂（1926-2006）、二風谷生まれ。二風谷尋常小学校卒業後、造林、木彫りなどの職業に就きながら、アイヌの民具や民話を収集。1972年に貝沢正と共に二風谷アイヌ文化資料館を開設。『ウエベケレ集大成』で菊池寛賞を受賞するなど、受賞多数。1994年、参議院議員に繰り上げ当選し、通称“アイヌ文化振興法”の制定に尽力した。



- 2) アイヌ文化振興法の正式名称は「アイヌ文化の振興並びにアイヌの伝統等に関する知識の普及及び啓発に関する法律」であり、1997年に次のような趣旨で發布された。「アイヌの人びとの民族としての誇りの源泉である」「アイヌの伝統及びアイヌ文化」が「十分な保存、伝承が図られているとはいえない難い状況」であり、かつ「国民一般の間では」「十分な理解が得られていない状況」であることから、「アイヌ文化の振興」と「アイヌの伝統等に関する国民に対する知識の普及及び啓発を図るための施策」を行い、「アイヌの人びとの民族としての誇りが実現する社会の実現」と「我が国の多様な文化の発展に寄与すること」を目的とする（『官報』(2225) 1997.9.18）。アイヌ文化振興法の批判は数多いが児島恭子（2003：358-91）をあげる。
- 3) 金田一京助（1882-1971）、盛岡市生まれ。東京帝国大学文化大学言語学科卒業。アイヌ語、アイヌの口承文芸をはじめ体系的に研究した言語学者。國學院大學教授、後に東京帝国大学教授、国語審議会委員を務める。1954年には文化勲章を受章するなど受賞多数。アイヌ語研究のみならず日本語研究や民俗学にも影響を及ぼした。著作多数。
- 4) 今日では「ユカラ」（ラは小文字）と表記するのが一般的だが、金田一の時代とその思想について述べるため、ここでは金田一が用いた「ユーカラ」で表記する。
- 5) 知里幸恵（1903-1922）、登別市生まれ。旭川区立女子職業学校卒業。日本語とアイヌ語のたくみな能力によって、金田一京助をサポートしたが、心臓病で急逝した。享年19歳。死後1923年に遺作、『アイヌ神謡集』が刊行され、その昔のアイヌへの憧憬を歌った美文調の序文が著名になった。登別市に知里を記念した記念館「知里森舎」がある。
- 6) もっともこれは金田一側の記録であり、知里側の記録には記載されていない、という（丸山 2003：24）
- 7) 野村義一（1914-2008）、白老村生まれ。白老尋常高等小学校卒業後、徴兵され、シベリア抑留を経験。帰国後は白老漁協理事、白老町議会議員、のちに30年にわたって社団法人北海道ウタリ協会理事長を務める。1992年12月、ニューヨークの国連本部での「国際先住民年」開幕式典記念演説が有名。著作に『アイヌ民族を生きる』（草風館、1996）がある。
- 8) 金田一にとってアイヌは他者でいなければならなかったのではないかと。盛岡の生まれで珍しい苗字ゆえに、「あいぬ（＝蝦夷<sup>マム</sup>）の末裔<sup>すす</sup>」だと疑われることが多く、金田一はそれに「真っ赤になって」、「同苗の為に、冤<sup>えん</sup>を雪ぐ弁解」をせねばならない、と書く（金田一 [1918]：689）。アイヌに興味をもち協力を得て研究しつつも、アイヌが自分と同一視されるのは絶対に拒否すべきものだったのだ。このことが金田一の研究を方向づけていた、と思えるのはうがちすぎだろうか。
- 9) それでもこの説がアイヌに自信を持たせたという側面もあったことが報告されている。1936年ごろにおきたことを長野喜代野はこう回想する。「偉い先生が四人、アイヌの骨格を測りに来たの。頭の骨。アイヌの子だけ呼び出されて、私も測られた。『アイヌは欧州系白人種だから、恥ずかしいことはない』って言われた。それからは自信をもったの。私は北海道人とは違うんだと思った。」（瀧口 2013：201）
- 10) 北原きよ子（1946-）、余市町生まれ。アイヌといわれるのは何故？との思いからアイヌの歴史を調べはじめ、今に至る。1980年、民族としての権利の確立や、アイヌ文化を学び、首都圏に住むアイヌ民族を知ってもらうことを目的とした関東ウタリ会の結成に参加、一時期会長を務めた。著書に『わが心のカツラの木』（岩波書店、2013）がある。
- 11) 民族的主体化とはアイヌ自らが民族をめぐる言説をつくりだし、自らの置かれた状況に積極的に関わりをもつようになることを指す（伊藤 1996）。
- 12) 結城庄司（1938-1983）、釧路生まれ。釧路湖陵高校卒業後、阿寒湖畔のコタン建設に参加し、北海道ウタリ協会理事、のちにアイヌ解放同盟を創設し代表となる。数々の糾弾闘争などアイヌの政治活動を展開する。45歳、急性肺炎で死亡。著作に

『アイヌ宣言』（三一書房、1980）がある。

- 13) 太田竜（1930-2009）、樺太生まれ、本名は栗原登一。東京理科大学中退。元日本革命的共産主義者同盟（第四インターナショナル日本支部）委員長。1970 年はじめはアイヌ解放運動、終わりごろは自然食の運動、反家畜制度、反米、秘密結社を含む反ユダヤ主義、反国際金融支配を唱え、その後、人類は“爬虫類人”によって支配されているという説を唱える。著書多数。
- 14) 著名なアイヌ文化伝承者の山本多助はこの時発言を求められ「熱心な先生たちの研究に敬意を払います。けれども、ある人の話を聞いていると、解剖の話を聞いているようだ。血も涙もない。学問には、人間の魂が必要だと思います」（『朝日新聞』1972.8.27）と答えたという。
- 15) 「狼」の主犯である大道寺将司は釧路の小学校でチカカップ美恵子の同級生であり、見聞したアイヌに対する差別に対する「胸の痛み」が破壊活動に結びついたという。後年、大道寺はチカカップにこのように述懐している。「いますぐに撃つべき敵は誰であるのかを明確にできなかったが故に、いつの日か結びつべき人々、そして権力の弾圧から防衛すべき人々を見失い、殺傷してしまった（中略）ぼくらは、人民という生きている具体的な存在を、人民あるいは大衆という概念でのみ理解していたのです。つまり、一人一人違った顔、名前、ぬくもりを持ち、違った生活を営んでいる人たちを、人民、あるいは大衆という概念で一括りに規定して、それでいいものと思っていたのです。」（大道寺 1984：56）
- 16) 林善茂（1922-2013）小樽市生まれ。北海道帝国大学農学部農業経済学科卒業後、『アイヌ原始農業の研究』で農学博士号を授与される。のちに北海道大学名誉教授。専門は農業経済学。著書に『考古民俗叢書 4 アイヌの農耕文化』（慶友社、1969）がある。
- 17) 貝沢正（1912-92）、平取町二風谷生まれ。平取尋常高等小学校高等科卒業、1941 年開拓団員として満州に渡り、肺結核を患い 2 年後に帰国。造材人

夫や農業で生計を立てながら、農地委員、農協理事、平取町議会議員、二風谷アイヌ文化資料館（名称当時）館長、ウタリ協会（現アイヌ協会）副理事長などを務める。著書に『アイヌわが人生』（岩波書店、1993）がある。

- 18) そこに同席していた太田竜は以下のように感想を書いている。「生まれたばかりのこのこどもが、一見、どんなに屈辱的にシャモ風の外見にまとわれていたとしても、この百年、シャモの学者たちの一方的な解剖材料となって来たすべてのアイヌ同族の復讐の怨念がそこに結晶しているのだ。この赤ん坊は、日に日に大きくなって、アイヌ復権のシンボルとなるのだ」。（太田 1973：151）もっとも太田はその後、貝沢と萱野を「これはベアになっている。ひたすら商売に精を出している」として「御用アイヌの窓口」の一つに数えているので、緊張関係は持続していた。（太田 1977：186）
- 19) チカカップ美恵子（1948-2010）釧路生まれ、本名は伊賀美恵子。油彩画、アニメーション彩色を経て、アイヌ文様刺繍作家になり、積極的にアイヌの諸運動に携わる。2002 年第六回女性文化賞受賞。著書に『風のめぐみ——アイヌ民族の文化と人権』（御茶の水書房、1991）などがある。
- 20) チカカップによると裁判に至るまで被告の更科源蔵（裁判中に死去し高倉新一郎に変更した）との交渉を行ったが、はかばかしい回答がなかったので、時効寸前まで弁護士と協議を重ねた上で訴訟をおこしたという。（チカカップ 1991：178）
- 21) 梅原猛（1925-）、宮城県生まれ。哲学者。京都市立芸術大学学長、国際日本文化研究センター初代所長、社団法人日本ベンクラブ会長、ものづくり大学総長などを歴任する。1999 年、文化勲章受章他受賞多数。著作多数。
- 22) 藤村は、アイヌの老人たちと生活を共にしながらその語りを聞き取り、自らアイヌの歌やユーカラを歌い、カムイノミもするという「これまでのとはまったくちがうタイプの研究方法」をとる研究者、と梅原に評価される。（梅原 [1981] 2001：423）

## 引用文献

- アイヌ文化保存対策協議会、1969、『アイヌ民族誌 上・下』第一法規出版。
- アイヌ民族の現在と未来を考える会編、1988、『明日を作るアイヌ民族』未来社。
- 新井かおり、2012、「アイヌの集落が自らの歴史を語り始めること——貝沢正が編集する地域史『二風谷』の到達」『応用社会学研究』(54)、219-236。
- チカッブ美恵子、1991、『風のめぐみ——アイヌ民族の文化と人権』御茶の水書房。
- 大道寺将司、1984、『明けの星を見上げて——大道寺将司獄中書簡集』れんが書房。
- 江上波夫ほか編、1980、『日本人とは何か——民族の起源を求めて（天城シンポジウム）』小学館。
- 現代企画室編集部編、1988、「アイヌ肖像権裁判・全記録」現代企画室。
- 花崎皋平、1986、「現代日本人にとって民族的自覚とは」『世界』(483)、99-117。
- 、2009、『風の吹きわたる道を歩いて——現代社会運動私史』七つ森書館。
- 東村岳史、2000、「現代における『アイヌ文化』表象——『文化振興』と『共生』の陰」好井裕明・山田富秋編『実践のフィールドワーク』せりか書房、228-250。
- 、2002、「状況としての『アイヌ』の思想と意義——『アスタリアヌ』による〈アイヌ〉表象の問い直し」『解放社会学研究』(14)、39-75。
- 、2006、『戦後期アイヌ民族—和人関係史序説——1940年代後半から1960年代後半まで』三元社。
- 北方ジャーナル編集部、1976「道庁爆破事件の犯人を推理する」『北方ジャーナル』(5)、24-31。
- 細川弘明、1998、「エコロジズムの聖者がマキャベリストとの同床異夢か——先住民族と環境保全主義の切り結ぶところ」『現代思想』26(6)、260-263。
- 伊藤泰信、1996、「アイヌの現在の民族誌にむけて」『民族学研究』61(2)、302-313。
- 貝沢正、1984、「はじめに」『アイヌ史の要点(抄)』社団法人北海道ウタリ協会アイヌ史編集委員会。
- 、1993、『アイヌわが人生』岩波書店。
- 木名瀬高嗣、1997、「表象と政治性——アイヌをめぐる文化人類学的言説に関する素描」『民族学研究』62(1)、1-21。
- 金田一京助、[1918] 1993、「金田一という姓」金田一京助全集編集委員会編『金田一京助全集 第十二巻 文化・民俗学』、三省堂。
- 、[1923] 1993、「アイヌの系統」金田一京助全集編集委員会編『金田一京助全集 第十二巻 文化・民俗学』、三省堂。
- 、[1930] 1993、「樺太・北海道の人種」金田一京助全集編集委員会編『金田一京助全集 第十二巻 文化・民俗学』、三省堂。
- 、[1951] 1993、「えみし（蝦夷）の国」金田一京助全集編集委員会編『金田一京助全集 第六巻 アイヌ語Ⅱ』、三省堂。
- 、[1968] 1997、『私の歩いて来た道』日本図書センター。
- 北原きよ子、2013、『わが心のカツラの木——滅びゆくアイヌといわれて』岩波書店。
- 小金井良精、1928、『人類学研究』大岡山書院。
- 児島恭子、2003、『アイヌ民族史の研究——蝦夷・アイヌ観の歴史的変遷』吉川弘文館。
- 丸山隆司、2002、『〈アイヌ〉学の誕生——金田一と知里と』彩流社。
- 、2003、「知里幸恵の〈言語〉」『普及啓蒙講演会報告集 平成15年度』財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構、16-45。
- 百瀬響、2004、「『アイヌ文化成立論』の現代的意味について」宇田川洋先生華甲記念論文集刊行実行委員会編『アイヌ文化の成立』北海道出版企画センター、391-401。
- 中曽根康弘・梅原猛、1996、『政治と哲学——日本人の新たな使命を求めて』PHP研究所。
- 成田得平ほか編、1985、『近代化の中のアイヌ差別の構造』明石書店。
- 二風谷部落誌編集委員会編、1983、『二風谷』。
- 日本民族学会研究倫理委員会、1989、「アイヌ研究に関する日本民族学会研究倫理委員会の見解」『民族学

- 研究』(54) 1.
- 小川正人、1997、『近代アイヌ教育制度史研究』北海道大学図書刊行会.
- 小熊英二、1995、『単一民族神話の起源——〈日本人〉の自画像の系譜』新曜社.
- 大蔵省印刷局、1997.9.18、『官報』(2225) .
- 尾本恵市、1996、『分子人類学と日本人の起源』裳華房.
- 太田竜、1971、『辺境最深部に向かって退却せよ!』三一書房.
- 、1973、『アイヌ革命論ユーカラ世界への〈退却〉』新泉社.
- 、1977、『アイヌモシリから出撃せよ』三一書房.
- 小内透編著、2010、『現代アイヌの生活と意識——2008年北海道アイヌ民族生活実態調査報告書』北海道大学アイヌ・先住民研究センター.
- レラの会編、1997、『レラ・チセへの道』現代企画室.
- 島蘭進、1995、「日本人論と宗教——国際化と日本人の国民的アイデンティティ」『東京大学宗教学年報』(13)、1-16.
- 清水昭俊、1998、「周辺民族と世界の構造」、清水昭俊編『周辺民族の現在』世界思想社、15-63.
- 新谷行、1979、『コタンに生きる人びと』三一書房.
- 竹内渉編著、2004、『野村義一と北海道ウタリ協会』草風館.
- 、2009、「北の風南の風——部落、アイヌ、沖縄。そして反差別」解放出版社.
- 瀧口夕美、2013、『民族衣装を着なかったアイヌ——北の女たちから伝えられたこと』編集グループSURE.
- 富山一郎、1994「国民の誕生と『日本人種』」『思想』(845)、34-56.
- 豊岡サンニョ・アイノ、1983、「アイヌ民族からのアイヌ論」『中央公論』98 (2)、304-313.
- 戸塚美波子、2003、『金の風に乗って』札幌テレビ放送株式会社.
- 植木哲也、2008、『学問の暴力——アイヌ墓地はなぜあばかれたか』春風社.
- 梅原猛、[1981] 2001「母文明の忘却——アイヌ語と日

- 本語」『梅原猛著作集 8 日本冒険 (下)』小学館.
- 、[1986] 2001、「遥かなる世界からの目を」『梅原猛著作集 8 日本冒険 (下)』小学館.
- 、[1991] 2001、「森の文明——和と循環の原理」『梅原猛著作集 17 人類哲学の創造』小学館.
- 、[1996] 2001、「共生と循環の哲学——永遠を生きる」『梅原猛著作集 17 人類哲学の創造』小学館.
- 梅原猛・埴原和郎編、1982、『アイヌは原日本人か』小学館.

## 引用ホームページ

- 「イランカラプテ」キャンペーン推進協議会、2013、「イランカラプテ」キャンペーン推進協議会ホームページ、(2013年12月8日取得、<http://www.irankarapte.com/index.html>)